

---

40cm

高月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

40cm

### 【Nコード】

N4939T

### 【作者名】

高月

### 【あらすじ】

身長146センチのちいこが、高校入学後まもなく発見した男子。氏名未詳。推定身長2メートル。あまりにも大きいものだから、ついつい彼のことばかり見つめちゃう。その気持ちが恋だと、いつになったら気付くことやら。そんなちいこの、空回りラブ。

一億光年先（前書き）

初投稿になります。どうぞよろしくお願いします。

## 一億光年先

「おはよ、ちいこ。今日もおつかれ」

「うーんおはよー。つかれたー」

朝。ホームルームの後、1時間目の担当教師が来るまでの間。やえちゃんとするこのやりとり。これは日課。

私なりに一生懸命勉強して、家から自転車ですぐ10分の公立高校になんとか受かった。平均よりほんのちよつと偏差値の高い学校。平均以下の成績しか出したことのない私がここに受かったのは、ひとえに、朝ゆつくりしたいから、これに限る。つまるところ、私は早起きが苦手なのだ。中学は学区の都合で、片道40分かかる学校だった。もちろん遅刻を何回もした。待ち合わせしているはずの友達には、私を待たずに学校に行くようになった。それくらい私の寝起きは悪い。だから、「毎日毎日いい加減にしなさい！」という母親のどなり声で目覚めるなどという気分沈む日々から脱却しようと、高校は朝ゆつくりと寝ていられる距離の学校を選んだのだ。

そう、だったはず、なのに。

入学してから一カ月。私は遅刻こそしないものの、毎朝担任の教師とほぼ同時に教室に滑り込む生活を送っていた。このままだと、数カ月後には遅刻する気がする。気がするというか、確実にする。

「あんた毎日朝からそんな全力疾走してて、すごいね」

「ありがとう。でも今日は本当に危なかった…ついに遅刻するかと…」

やえちゃんは憐れむような見放してるような、なんともいえない顔でこつちを見た後、「次、移動教室だよ。はやく準備して」とい

った。

「え、移動？現代文なの？？」

「生物に変更らしい。ちいこは息を整えるのに必死だったと思うけど、ホームルーム中に先生ちゃんといったからね」

「うおーまじかー」

先生ってばいつのまにそんなことを。とかぶつぶつ言っていたら、やえちゃんも私を置いてさっさと行ってしまった。私も慌てて教室を出る。生物の教科書置き勉強してよかった。生物といわずあらゆる教科書を置き勉強してるけど。

「やえちゃん、ちょっとくらい待っていてくれてもいいじゃんよー」

同じように移動教室に向かう生徒たちの間を、先ゆくやえちゃん目指してバタバタと走り抜ける、途中。

「うえっ」

思わず変な声をあげてしまうくらい、でかい人間がいた。

すれ違った瞬間の違和感が半端ない。たぶん私の頭はその人の腰くらいまでしかなかったんだではなかるうか。15歳の少女の頭が腰の位置って、そんな馬鹿な。

ついつい振り返って確認してしまう。

「でけえ…」

男の人。ついでにいうと制服着てるから、学生。近くにいる他の

人間と比べて、当然のように頭一つ分は背が高い。つまりでかい。2メートルくらいあるよ、たぶん。

「世の中にはあんなに大きい人もいるわけですね…」

私なんて150センチにも満たないつてのに。いやもちろん成長期だからまだまだ伸びますけどね、なんてボケっとしてたら、授業開始の鐘が鳴った。生物室までは、まだ遠い。遅刻決定。

とにかく遠い

「あ。」

でっかい人だ。

この前推定身長2メートルとおぼしき男子生徒を発見して以来、私はよくその人を見かけるようになった。

入学してからつい最近まで見たことがなかったのは、どうやら彼の教室が私とは違う階にあるかららしい。彼の教室は生物室のある東館の3階。私の教室は同じ東館だけど、2階にあった。別に教室の場所をわざわざ調べたわけじゃない。移動教室で生物室に行くとき、よく見かけるからそう考えただけ。だから彼が何組かとか、わからない。上履きの色が私と一緒にだから、同じ1年生なんだなっことは、知ってるけれど。

いつもは移動教室のときに見かけるのだけど、今日は教室の窓から見えた。私のクラスの教室は運動場に面していて、他クラスの体育の授業風景がよく見える。今はまだ休み時間だから、彼のクラスはこれから体育なんだろうか。それとももう終わって、教室に帰るところなのだろうか。

彼の隣に立っている人も同級生のはずだけど、その人と比べると彼は明らかにひとまわりは大きい。熊みたいだ。むしろモンスターレベル。

「ちいこ、最近いつにもましてポケっとしてるよね」

「やえちゃん、あの人、すごくでかいよね」

「うん？」

やえちゃんも小学生のころからの友達だから、私が脈絡のない返しをしたってへっちゃん。慣れっこになっちゃんってるらしい。申し訳ないとは思うのだけど、なかなかこの癖って治らない。

「あー、あの人？確かにおっきいね」

「2メートルくらいあるよね」

「いやさすがにそこまではないでしょ…180後半くらいじゃないの？」

「ここから見下ろすとちっちゃく見えるけど！でも実際に目の前に立つと2メートルあるから！モンスターだから！」

私が一生懸命になって語ると、やえちゃんは興味なさそうに、「へえー」といった。わかってない。やえちゃんてばわかってない。びっくりするくらいおっきいのに。思わず変な声出しちゃうくらいおっきいのに。あまりにもおっきいから、ちよっと威圧感を感じて私なんか最初の一回以来彼の横をすり抜けることもできていない。毎回遠目に彼を発見するたび、微妙に遠回りして避けている。

彼がもし冗談で回し蹴りとかしたとして、そのとき運悪く私なんぞが近くにいたら、まずお陀仏だ。なんでって、頭に直撃すること必死な身長差だから。

「そこるところを、やえちゃんはわかってないよ」

「よくわかんないけど、ちいこが怯えちゃうくらいにはでかいわけね」



「そういごと」

「まあちいこはちっちゃいからねー。145センチだっけ？」

「違うよ！145・5センチだよ！こないだの健康診断で伸びてたっていったじゃん！」

やえちゃんはこれまた興味なさそうに、「そうだっけ？」とか言ってる。もう、ほんとにやえちゃんはわかってない。あのでっかい人のでかさもわかってないし、私の身長にとつて0・5センチがどれだけ重要かってことも、まったくわかってない。ダメな親友だ、ほんとに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4939t/>

---

40cm

2011年10月9日03時50分発行